付篇

山形重弧文覚書

田畑　直彦

1．はじめに

弥生時代前期の山口県西部の土器は「綾羅木式土器」としてよく知られているが、これに伴う特徴的な文様として山形重弧文がある。山形重弧文は壺の胴部に山形文と重弧文を連続的に描くことを特徴とし、山口県西部の響灘沿岸、現在の下関市域にほぼ限定して分布する文様である。斉一性の強い遠賀川式土器において、山形重弧文のように比較的狭い特定の地域に分布する文様は希であり、注目を集めてきた。

山形重弧文が施文された壺がまとまって検出されたのは、弥生時代前期の埋葬遺跡として著名な下関市豊浦町所在の中ノ浜遺跡の調査を嚆矢とする[註1]。その後、下関市菊川町上原遺跡でも土壙や溝から同様の壺が多数出土した[註2]。上原遺跡を調査した冨士埜勇氏によれば、中ノ浜遺跡と上原遺跡は文様（山形重弧文）において、極めて特徴的な共通点を持つことを吉村次郎氏が早い段階で指摘していたという。また、冨士埜氏自身も上原遺跡出土土器の詳細な検討を通して、中ノ浜遺跡と上原遺跡が密接な関係にあることを強調している[註3]。

近年、近藤喬一・乗安和二三氏は『山口県史　資料編考古Ⅰ』で弥生時代前期の土器文様の集成と検討を行い、山形重弧文についても述べている[註4]。その分布については、響灘沿岸地域を中心に東は山口盆地、北は石見地方にまで及んでいると指摘した。また、載頭山形文と重弧文を組み合わせて創出されて県西部で成立した独自の文様で、具体的には中ノ浜遺跡・上原遺跡の状況から田部盆地から川棚平野にかけての地域で新たに成立した文様としている。

なお、両氏の作成した集成図においては、中ノ浜・上原遺跡出土土器を中心に新たに採拓した山形重弧文の拓本が多数掲載されており、検討可能な資料が大幅に増加した[註5]。また、後述するように近年の発掘調査によっても資料が増加しつつある。

一方、筆者は吉田遺跡において附属図書館敷地から出土し、既に報告されている土器の中で山形重弧文が施文された壺の胴部片を確認した[註6]（92）。小片であるが、山形文は3条単位、重弧文は4条単位で施文されている。下部が欠損しているものの、残存部分から山形文と重弧文が連続して施文されていたと推測される。筆者の編年[註7]でⅡ－Ⅲa期に位置づけられ、恐らく響灘沿岸地域からの搬入品であろう。また、現在のところ山口県内では下関市以外における唯一の出土例であり、地域間交流を裏付ける重要な資料である。以上のような資料の増加を踏まえ、今回、山形重弧文が施文された土器の集成と若干の検討を行いたい[註8]。なお、全ての土器を実見していないので、詳細な検討は、別の機会にゆずりたい。

2．山形重弧文とは

上記のように山形重弧文とは、山形文と重弧文をとぎれることなく連続的に描くことを特徴とする。いずれも壺の胴部に施文されており、現在のところ壺以外の器種に施文された例はない。山形重弧文の山形文を見ると、一般的な山形文とはやや異なる。山形重弧文の山形文の数は1－7までである。頂部の角度は約50－70度で、一般的な山形文の山形の頂部の角度が約90－110度のものが主体であるのに対して鋭い。これは、重弧文1単位に相当する幅に2単位以上の山形文を施文することに起因

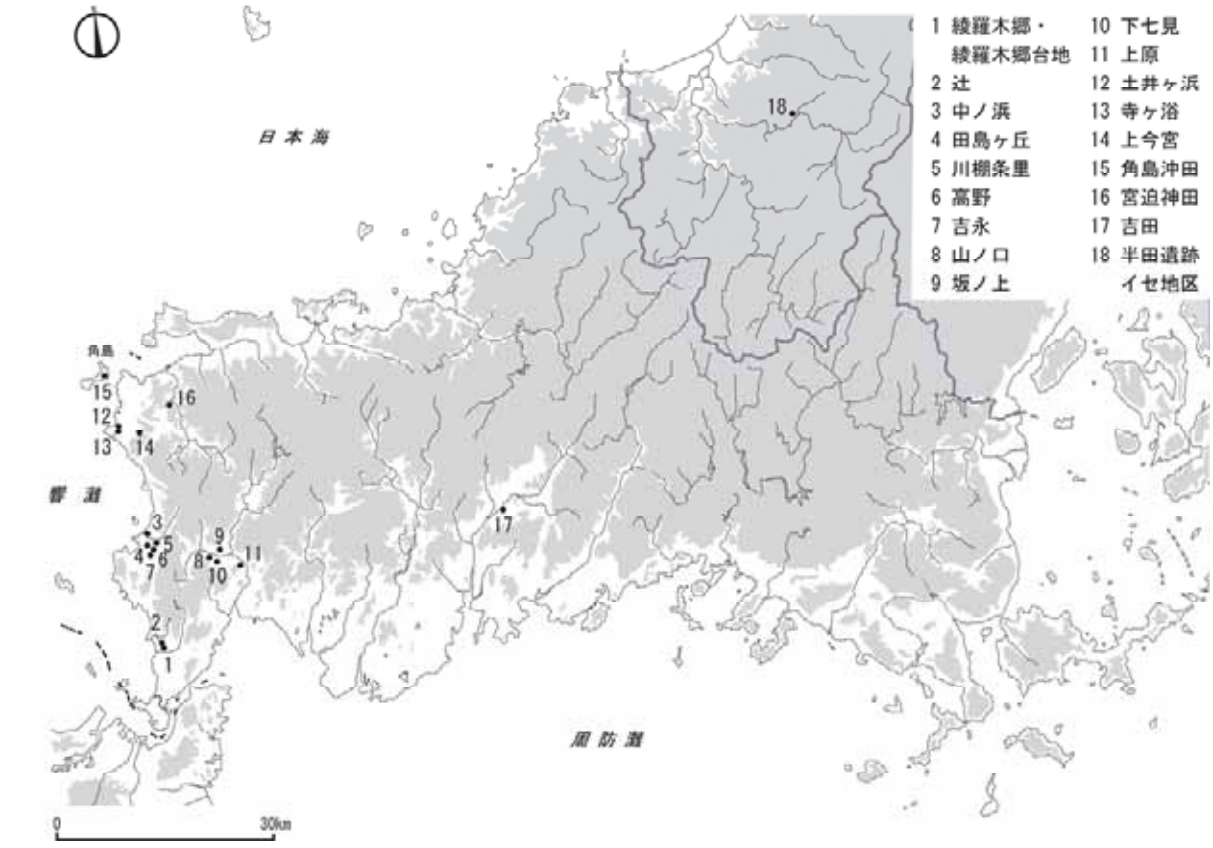


図 40　山形重弧文施文土器の分布図

している。このため、山形文のみが残存する破片においても、頂部の角度が約50ー70度であれば山形重弧文の一部である可能性が高く[註9]、さらに2単位以上の連続した山形文であれば可能性はより高くなる。

上記のような山形重弧文の山形文の形状は、一般的な山形文よりも90度回転させた羽状文に近似している。このことから山形重弧文は単に山形文と重弧文を組み合わせたのではなく、羽状文の属性も取り入れたと考えられる。現在のところ、山形重弧文が施文された最古の土器は中ノ浜遺跡出土の小型壺(5ー10)である。これらはⅠaーⅠb期に位置づけられることから、山形重弧文は同遺跡が位置する川棚平野で弥生文化成立直後に生み出された文様と推測される。

3. 施文方法

施文方法については、松藤暢邦氏により詳細な検討がなされている[註10]。松藤氏によれば、施文順序はⅠb期には向かって左から右方向に施文されたものが多く、Ⅱ期以降、右から左方向へ施文されたものが増加するという。また、上記の順序とは関わりなく山形文→重弧文の順序で施文されたもの、逆に重弧文→山形文の順序で施文されたものもⅡ期以降に増加するとともに、時期が降るにつれ1個体に施される山形重弧文[註11]の数が増加する傾向があるという。壺の胴部文様全般において横位分割と文様が複雑化する方向性と基本的に軌を一にしているといえよう。

また、施文具について筆者がこれまで観察した範囲では、Ⅰaーb期はいわゆるヘラ状工具とみられるが、Ⅱ期以降は鋸歯状圧痕がつかない貝の腹縁やタマキガイの押圧によるものが主体となるようであり、これも壺文様全般の傾向と一致している。

4. 他文様との組み合わせ

山形重弧文と他文様との組み合わせをみると、①単独で施文されたもの、②羽状文と組み合うもの、③その他の文様と組み合うものに大別できる。Ⅰb期は全て単独で施すものであるが、Ⅱ期以降、羽状文を主文様帯として、その下位に重弧文や載頭山形文・鋸歯文などの副文様帯[註12]が付加されるようになると、山形重弧文においても無軸羽状文の下位に施されるものが多くなる。しかし、Ⅲb期に至っても山形重弧文単独で施文されるものがあり(81、82)、古い属性も残存したことがうかがえる。

5. 分布

a.地域

今回集成した93点[註13]のうち、川棚・吉永平野、田部盆地の遺跡からの出土土器が70点あり、全体の約75%を占める。川棚・吉永平野より南の地域では極めて少なく、綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡では3点しか報告されていない。膨大な報告資料から壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は数%以下と推測され、上記3点の壺も川棚・吉永平野の遺跡からの搬入品である可能性が高い。

一方、下関市豊北町ではこれまで土井ヶ浜遺跡出土例のみが知られていたが、今回、上今宮、寺ヶ浴、角島沖田、宮迫神田遺跡での出土が確認できた。これらの遺跡を含めて山形重弧文が施文された土器は17点あり、全体の約17%を占める。時期的にもⅠbーⅢb期までの資料が存在する。遺構に伴う出土例が極めて少ないので、壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は定かでないが、綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡よりも高率であることは確実であろう。以上により、山形重弧文は川棚・吉永平野、田部盆地を中心に以北の下関市豊北町にかけてが主な分布域と考えられる。

次に、川棚・吉永平野と田部盆地の遺跡における山形重弧文が施文された土器の出土状況を概観しておきたい。川棚・吉永平野では、中ノ浜、田島ヶ丘、川棚条里、高野、吉永遺跡で山形重弧文が施文された壺が出土している。中ノ浜遺跡出土の壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は未公表資料が多いため定かでないが、比較的まとまって資料が公表されている1次調査の報告[註14]が参考となる。冨士埜氏は1次調査において、山形重弧文が施された壺を少なく見積もって43%強と推測している[註15]。また、5ー7次調査においても、山形重弧文が施文された壺が多数出土している。

一方、近年、この地域では集落遺跡の調査が相次いだ。特にⅡ期の環濠、土壙などが検出された吉永遺跡、ⅢaーⅢb期の土壙が検出された高野遺跡からは当該期の土器が大量に出土している。吉永遺跡は中ノ浜遺跡から直線距離で約3km南、高野遺跡は直線距離で約2.1km南東に位置しており、やや離れているものの中ノ浜遺跡で埋葬が行われていた時期に存在した集落である。

吉永遺跡Ⅴ・Ⅵ地区SD314では、報告書掲載の胴部に文様が施文された壺21点のうち、山形重弧文が施文されたものが4点、約19%を占める[註16]。他に山形重弧文が施文された土器が数点確認されているものの、報告書では山形重弧文の占める割合は低率であることが指摘されている。従って、山形重弧文の割合は多く見積もっても20%を越えることはないと推測される。高野遺跡では、報告書掲載の胴部[註17]に文様が施文された壺29点のうち、山形重弧文が施文されたものが11点、約41%と高率であるが、未公表資料を含めた割合は定かではない。仮に上記の割合が妥当であるとすれば、

山形重弧文は高野遺跡が位置する川棚平野に分布の中心があり、川棚平野と丘陵を隔てて南に位置する吉永平野は分布の中心からややはずれると見ることが可能であろう。また、上原遺跡を擁する田部盆地と川棚平野は川棚川の上流を遡り久野川を下るルートで結ばれており、密接な交流があったと指摘されている[註18]ことから、山形重弧文は川棚平野と田部盆地を中心に盛行したと推測される。

一方、中ノ浜遺跡における山形重弧文の占める割合が吉永・高野遺跡よりも高率であるとすれば、中ノ浜遺跡では、副葬・供献用に山形重弧文が施文された壺が意図的に選別された可能性が考えられよう。今後、各遺跡の未公表資料を踏まえた慎重な検討が必要である。

田部盆地では、山ノ口遺跡、坂ノ上遺跡、下七見遺跡、上原遺跡から山形重弧文が施文された壺が出土している。上原遺跡では、冨士埜氏によれば、Ⅱ－Ⅲa期の壺の文様のうち、山形重弧文の占める割合が約50％を占めるという[註19]。下七見遺跡では公表されている資料を見る限り上原遺跡ほど山形重弧文は見られないが、未公表資料が多数あるため[註20]、状況は不明確で再検討が必要である。なお、上原遺跡、下七見遺跡では山形重弧文の下位に縦方向の弧文が施文された壺（56、67、73）が出土している。現在のところ、同じモチーフの文様は両遺跡以外では確認しておらず、小地域色と両遺跡の交流がうかがえる資料である。

b.時期

時期別の分布をみると、Ⅰa－b期に属するもの及び可能性のあるものは中ノ浜遺跡に集中している。しかし、少量ながら角島沖田遺跡でも認められ、島根県唯一の出土例である半田遺跡イセ地区出土土器[註21]もこの時期に所属すると考えている。胎土分析は行われていないが、恐らく搬入品であろう[註22]。山陰地方の弥生文化の成立には響灘沿岸地域の集団が少なからず関与していると想定されるので[註23]、今後、山陰地方での類例の増加が期待される。

Ⅱ－Ⅲa期に属するものが最も多く、今回の集成では71点、全体の約76％を占め、響灘沿岸全域での分布が認められる。しかし、以後は減少し、Ⅲb期には川棚平野、田部盆地以北で少量分布するのみとなり、中期初頭には消失する。Ⅲb期における山形重弧文の急減はこの時期に顕著となる壺文様の複雑化が深く関係していると考えられる。壺文様の複雑化については、筆者も近藤・乗安氏が述べるように[註24]、人口増加やこれに伴う社会的緊張、高潮の被害などにより社会の枠組みが揺らぎ、土器づくりにおける集団的規制が弛緩した結果と捉えている。こうした状況下において、弥生文化成立以来の伝統的な文様であった山形重弧文は急速に廃れたのであろう。

そして、中期初頭になると綾羅木郷遺跡では城ノ越式土器の存在に象徴されるように北部九州の影響が顕著となる。一方、川棚・吉永平野、田部盆地以北の響灘沿岸地域では、壺・甕において内折口縁が盛行するなどⅢb期の要素が残存し、次段階から北部九州の影響が顕著となる。このことから、上記の地域では山形重弧文の分布に象徴された紐帯が中期初頭までは保たれていたと考えられる。

6．おわりに

今回の集成で、山形重弧文は川棚・吉永平野、田部盆地を中心に以北の下関市豊北町にかけて分布し、響灘沿岸地域で最大規模の集落が存在した綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡では極めて少ないことが確認できた。山形重弧文を含めた土器の文様にどのような意味が込められていたのかは定かではない。しかし、主に川棚・吉永平野、田部盆地から下関市豊北町にかけて山形重弧文を用いた背景には、これらの地域間で陸路、海路を通じた密接な交流が存在したことを意味している。このことは、

従来から指摘されるように響灘沿岸における弥生文化の成立と展開を捉えるうえで注目すべき視点であろう。また、今後、山陰・九州など響灘沿岸地域と交流のあった地域でも、山形重弧文が施文された壺が出土する可能性は高い。課題は山積しているが、既報告資料及び遺構や他遺物との関連について検討を進めることにより、さらに踏み込んだ議論ができることを期待したい。

謝辞

小稿執筆にあたっては、下記の個人・機関に便宜をはかっていただき、有益なご教示を受けた。記して感謝いたします。

河田聡、河村吉行、宝川昭男、中村友博、乗安和二三、藤本有紀、松藤暢邦、下関市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、山口県史編さん室

[註]

1) 豊浦町教育委員会(編)(1990)『史跡　中ノ浜遺跡』豊浦(山口)

2) 冨士埜勇「Ⅲ遺構・遺物」菊川町教育委員会(編)(1976)『上原遺跡発掘調査報告Ⅰ』、菊川(山口)

3) 冨士埜勇(1993)「山口県菊川町所在上原遺跡出土弥生土器」九州古文化研究会(編)『古文化談叢第(30)巻上』、 北九州
なお、冨士埜氏は山形重弧文を「重弧山形文」と呼称している。

4) 近藤喬一・乗安和二三(2000)「6　集成図　弥生前期の土器文様」山口県(編)『山口県史　資料編考古Ⅰ』、山口

5) 山口県史編さん室のご好意で掲載された拓本について、各遺跡の出土遺構と縮尺について確認させていただき、掲載を許していただいた。

6) 河村吉行(1985)「第2章中央図書館増築予定地M−16区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口

7) 田畑直彦(2003)「山陰地方における綾羅木系土器の展開」近藤喬一先生退官記念事業会(編)『山口大学考古学論 集』、山口
以下の編年は上記文献に基づく。

8) 掲載した土器実測図、拓本、写真は各文献から一部改変の上掲載した。

9) 今回の集成にあたっては上記を根拠に判断し、山形のみが残存している破片も含めている。

10) 松藤氏が1993年度に九州大学文学部に提出した卒業論文「西部瀬戸内における弥生時代前期壺形土器の研究−山形重弧紋土器を中心として−」による。ご好意により、言及を許していただいた。

11) 山形文1単位と重弧文1単位が組み合うものを山形重弧文の一単位とする。

12) 前掲註4

13) 各遺跡の未報告資料から、実際には150点以上は出土していると推測される。

14) 國分直一・伊東照雄・木下尚子(1988)「中ノ浜遺跡の弥生時代前記埋葬−第一次調査報告−」梅光女学院大学(編)、『地域文化研究第3号』、下関

15) 前掲註3

16) 向上昭彦ほか(2003)「Ⅲ調査の成果2遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『吉永遺跡(Ⅴ地区)』山口県埋蔵文 化財センター調査報告第38集、山口
向上昭彦ほか(2004)「Ⅲ調査の成果2遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『吉永遺跡(Ⅵ地区)』山口県埋蔵文化財センター調査報告第43集、(財)山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター、山口

17) 谷口哲一(1999)「Ⅲ調査の成果1．第一次調査(平成7年度)(2)遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『高野　遺跡(北地区)』山口県埋蔵文化財センター報告第9集、山口

18) 冨士埜勇(1986)「城山遺跡とみち」豊浦町教育委員会(編)『城山遺跡発掘調査報告』、豊浦(山口)

19) 前掲註3

20) 宝川昭男氏のご教示を得た。

21) 矢野謙一・中川寧・中村豊(1994)「島根県匹見町イセ遺跡の資料紹介ー土師器・弥生前期・縄文晩期の土器ー」島根考古学会(編)『島根考古学会誌』第11巻

22) 中村友博先生のご教示を得た。

23) 前掲註7、田畑直彦(2003)「長門北浦地域における弥生文化の成立」立命館大学考古学論集刊行会(編)『立命館　大学考古学論集Ⅲ』、京都

24) 前掲註4

遺跡文献

1．伊東照雄(1981)「Ⅳ遺構と遺物2弥生時代(2)遺構と遺物」下関市教育委員会(編)『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第Ⅰ集』、下関

2．前掲註4

3．伊東照雄(1980)「弥生式土器の文様と施文具」国分直一博士古稀記念論集編纂委員会(編)『日本民族とその周辺考古篇』、下関

4．前掲註1

5．豊浦町教育委員会(編)(1990)『山口県指定史跡　中ノ浜遺跡環境整備報告書』、豊浦(山口)

6．乗安和二三(1985)「Ⅴ遺物」豊浦町教育委員会(編)『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊浦(山口)

7．前掲註14

8．國分直一(1961)「無田遺跡と周辺の諸遺跡」山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要第4集』

9．藤本有紀(2005)「第五次調査」下関市教育委員会豊浦教育支所(編)『川棚条里跡4』、下関市文化財調査報告書1、下関

10. 前掲註17

11. 前掲註16　向上昭彦ほか(2003)

12. 前掲註16　向上昭彦ほか(2004)

13. 河名達雄他「Ⅳ遺物1．弥生土器」山口県教育委員会(編)『山ノ口遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第140集

14. 阿字雄徹他(1988)「坂の上遺跡」山口県教育委員会(編)『坂ノ上遺跡　植松古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告書第113集、山口

15. 磯部貴文(1989)「第4章遺物1土器」菊川町教育委員会(編)『下七見遺跡Ⅰ』、菊川(山口)

16. 宝川昭男(1992)「第Ⅳ章遺物1土器及び土製品」菊川町教育委員会(編)『下七見遺跡Ⅱ』、菊川(山口)

17. 前掲註2

18. 乗安和二三(1982)「Ⅱ調査の概要4．出土遺物」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第2集豊北(山口)

19. 乗安和二三(1983)「Ⅱ調査の概要4出土遺物(1)弥生土器」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第8次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第5集、豊北(山口)

20. 乗安和二三(1984)「Ⅱ調査の概要4出土遺物(1)弥生土器」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第6集、豊北(山口)
21. 有福史博(2005)「第3章Ⅲ寺ヶ浴遺跡各区の遺構と遺物」土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(編)『土井ヶ浜遺跡周辺遺跡群　寺ヶ浴遺跡　広田遺跡　磯地遺跡』、下関市文化財調査報告書9　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第38集、下関
22. 田部秀男(2003)「第4章第3節南地区の遺構と遺物」豊北町教育委員会(編)『中平尾遺跡・上今宮遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集、豊北(山口)
23. 古庄浩明(2000)「四、出土遺物1，土器」『角島・沖田遺跡』豊北町教育委員会(編)山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第18集、豊北(山口)
24. 前掲註7　田畑(2003)
25. 堀田浩一他(2005)「Ⅲ宮迫神田遺跡(2)遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『宮迫神田遺跡　的場遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第51集　下関市文化財調査報告書11　山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第40集、山口、下関
26. 河村吉行(1985)「第2章中央図書館増築予定地M−16区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口
27. 矢野健一(1993)「イセ遺跡」匹見町教育委員会(編)『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』、匹見(島根)
28. 矢野謙一・中川寧・中村豊(1994)「島根県匹見町イセ遺跡の資料紹介ー土師器・弥生前期・縄文晩期の土器ー」島根考古学会(編)『島根考古学会誌』第11巻
29. 松本岩雄(1992)「石見地域」正岡睦雄・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』、木耳社、東京

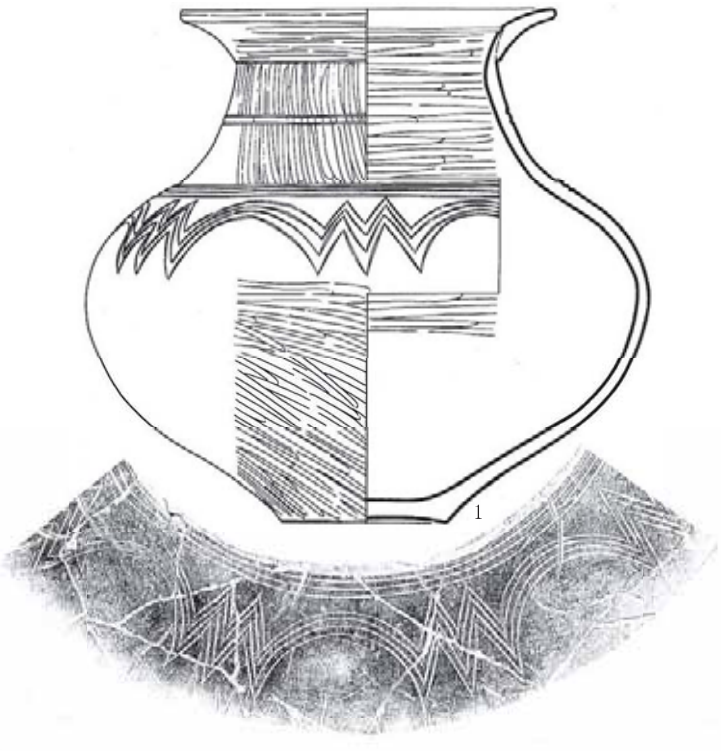
表８　山形重弧文施文土器の集成表①

番号	遺跡名	地区・遺構名	時期	文様組み合わせ	備考	文献
1	綾羅木郷	ⅤⅣ地区L.N6018	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史233	1、2
2	綾羅木郷台地	明神地区	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史13	2
3	綾羅木郷	TI地区L.N5305-1	Ⅱ～Ⅲa	山形重弧文		1
4	辻		Ⅲa	無軸羽状文+山形重弧文	拓本県史48	2、3
5	中ノ浜	9次トレンチ1区ST905副葬	Ⅰa～Ⅰb	山形重弧文		6
6	中ノ浜	9次トレンチ1区ST908供献	Ⅰa～Ⅰb	山形重弧文		6
7	中ノ浜	5～7次F3区	Ⅰa～Ⅰb	山形重弧文		4
8	中ノ浜	5～7次	Ⅰa～Ⅰb	山形重弧文	県史拓本69	2、5
9	中ノ浜	1次Bトレンチ3	Ⅰa～Ⅰb	載頭山形文＋山形重弧文	拓本県史86	2、3
10	中ノ浜	5～7次H4区2号遺構	Ⅰa～Ⅰb	山形重弧文		4
11	中ノ浜	1次第4石群	Ⅰb～Ⅱ	山形重弧文	拓本県史73	2、7
12	中ノ浜	5～7次	Ⅰb～Ⅱ	山形重弧文	拓本県史79	2、4
13	中ノ浜	5～7次	Ⅰb～Ⅱ	山形重弧文	拓本県史78	2、4
14	中ノ浜	5～7次	Ⅰb～Ⅱ	山形重弧文＋重弧文	拓本県史71	2、4
15	中ノ浜	5～7次Ⅰ2区1号遺構	Ⅱ	有軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史97	2、4
16	中ノ浜	9次Bトレンチ4区第4層	Ⅱ	山形重弧文		6
17	中ノ浜	5～7次Ⅰ3区10号遺構	Ⅱ	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史90	2、4
18	中ノ浜	1次Aトレンチ2	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史74	2、7
19	中ノ浜	1次Aトレンチ3、Bトレンチ1	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史70	2、7
20	中ノ浜	5～7次	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史80	2、4
21	中ノ浜	5～7次	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史68	2、4
22	中ノ浜	5～7次	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史84	2、4
23	中ノ浜	1次Bトレンチ	Ⅱ～Ⅲa	山形重弧文	拓本県史76	2、7
24	中ノ浜	5～7次	Ⅱ～Ⅲa	山形重弧文	拓本県史81	2、4
25	中ノ浜	1次1号石棺	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文	33と同一か	7
26	中ノ浜	9次表採	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		6
27	中ノ浜	9次Bトレンチ2区第4層	Ⅱ～Ⅲa？	不明　山形重弧文(山形文)		6
28	中ノ浜	9次Bトレンチ3区第4層	Ⅱ～Ⅲa？	無軸羽状文＋山形重弧文		6

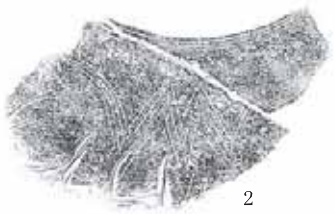
表９　山形重弧文施文土器の集成表②

番号	遺跡名	地区・遺構名	時期	文様組み合わせ	備考	文献
29	中ノ浜	9次Eトレンチ1区第2層	Ⅱ～Ⅲa？	不明　山形重弧文(山形文)		6
30	中ノ浜	1次8号石棺	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		7
31	中ノ浜	9次表採	Ⅱ～Ⅲa？	不明　山形重弧文		6
32	中ノ浜	1次	Ⅲa～Ⅲb	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史87か	2、4
33	中ノ浜	1次	Ⅲa～Ⅲb	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史88	2、4
34	中ノ浜	1次4号配石	Ⅲa	山形重弧文	拓本県史77	2、7
35	中ノ浜	5～7次D1区4号人骨付近	Ⅲb	山形重弧文	拓本県史75	2、4
36	田島ヶ丘		Ⅲb	無軸羽状文＋山形重弧文	松藤氏教示	3、8
37	高野	SK02043	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		10
38	高野	SK02043	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		10
39	高野	SK03054	Ⅲa	山形重弧文		10
40	高野	SK02016	Ⅲa	不明　山形重弧文(山形文)		10
41	高野	SK04069	Ⅲa	山形重弧文(山形文)		10
42	高野	SK03059	Ⅲa	山形重弧文		10
43	高野	SK03067	Ⅲa	不明　山形重弧文(山形文)		10
44	高野	SK03067	Ⅲa	山形重弧文		10
45	高野	SK03055	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		10
46	高野	SK03046	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		10
47	高野	SK03070	Ⅲb	無軸羽状文＋山形重弧文		10
48	川棚条里	KT5C－SK175Ⅲ	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		9
49	吉永	Ⅴ地区SD314	Ⅱ	鋸歯文＋山形重弧文		11
50	吉永	Ⅴ地区SD314	Ⅱ	山形重弧文		11
51	吉永	Ⅴ地区SD314	Ⅱ	無軸羽状文＋山形重弧文		11
52	吉永	Ⅵ地区SD314	Ⅱ	山形重弧文		12
53	山ノ口	SK49	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文		13
54	坂ノ上		Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文(山形文？)		14
55	下七見	第25地区SK20	Ⅲa	山形重弧文		16
56	下七見	第11地区SK20	Ⅲa	山形重弧文		15
57	下七見	第10地区SK5	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		15
58	下七見	第3地区SK3	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		15
59	下七見	第27地区SK24	Ⅲb	無軸羽状文＋山形重弧文		16
60	上原	土壙28	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史113	2、17
61	上原	土壙5	Ⅱ	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史120	2、17
62	上原	土壙5	Ⅱ	山形重弧文	拓本県史104	2、17
63	上原	土壙41	Ⅱ	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史105	2、17
64	上原	土壙33	Ⅱ	山形重弧文＋縦方向綾杉文		17
65	上原	土壙33	Ⅱ	山形重弧文＋縦方向綾杉文	拓本県史110	2、17
66	上原	土壙61	Ⅱ	山形重弧文		17
67	上原	土壙61	Ⅱ	山形重弧文＋縦方向弧文	拓本県史111	2、17
68	上原	土壙70	Ⅱ	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史106	2、17
69	上原	土壙42	Ⅲa	山形重弧文	拓本県史107	2、17
70	上原	土壙35	Ⅲa	山形重弧文	拓本県史109	2、17
71	上原	土壙49	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		17
72	上原	土壙49	Ⅲa	山形重弧文		17
73	上原	土壙44	Ⅲa	山形重弧文＋縦方向弧文	拓本県史108	2、17
74	上原	土壙47	Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文	拓本県史121	2、17
75	土井ヶ浜	7次	Ⅱ～Ⅲa?	無軸羽状文＋山形重弧文		18
76	土井ヶ浜	8次	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文(山形文)		19
77	土井ヶ浜	9次	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文(山形文)		20
78	土井ヶ浜	9次	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文		20
79	土井ヶ浜	9次	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文(山形文)		20
80	寺ヶ浴	SX0061	Ⅲa～Ⅲb	山形重弧文		21
81	寺ヶ浴	SX0056	Ⅲb	山形重弧文		21
82	寺ヶ浴	SX0056	Ⅲb	山形重弧文		21
83	上今宮	南地区Bトレンチ3	Ⅲa～Ⅲb?	不明　山形重弧文		22
84	角島沖田		Ⅰb	山形重弧文		23
85	角島沖田		Ⅱ	有軸羽状文＋山形重弧文		23、24
86	角島沖田		Ⅱ	山形重弧文		23
87	角島沖田		Ⅱ～Ⅲa	山形重弧文		23
88	宮迫神田	C区遺物包含層	Ⅱ～Ⅲa	有軸羽状文＋山形重弧文		25
89	宮迫神田	C区遺物包含層	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		25
90	宮迫神田	C区遺物包含層	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		25
91	宮迫神田	C区遺物包含層	Ⅱ～Ⅲa	無軸羽状文＋山形重弧文		25
92	吉田	附属図書館第4層黒褐色粘質土	Ⅱ～Ⅲa?	不明　山形重弧文		26
93	半田遺跡	イセ地区C2区第3層	Ⅰb	山形重弧文		27～29

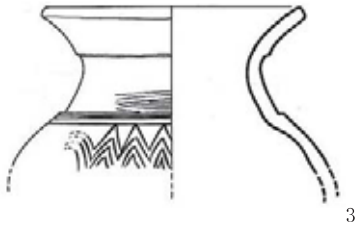
※時期は註7文献による。
※備考の県史と数字は、註2文献と挿図中の番号を示す。
※(山形文)は山形文のみ残存していることを示す。



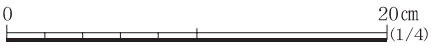
綾羅木郷遺跡ⅤⅣ地区ＬＮ6018

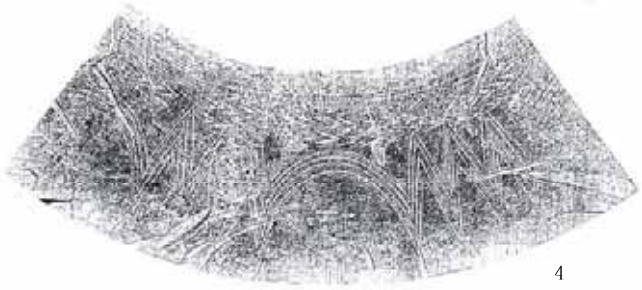


綾羅木郷台地遺跡明神地区

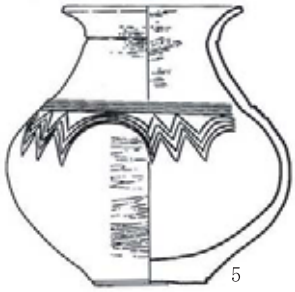


綾羅木郷遺跡ＴⅠ地区Ｌ．Ｎ 5305-1

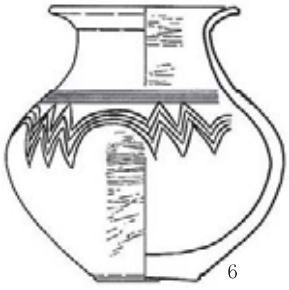




辻遺跡



９次Ｅトレンチ１区
ＳＴ905 副葬



９次Ｅトレンチ１区
ＳＴ908 供献

縮尺任意

５～７次Ｆ３区

中ノ浜遺跡

図 41　山形重弧文施文土器①（綾羅木郷遺跡・綾羅木郷台地遺跡、辻遺跡、中ノ浜遺跡）

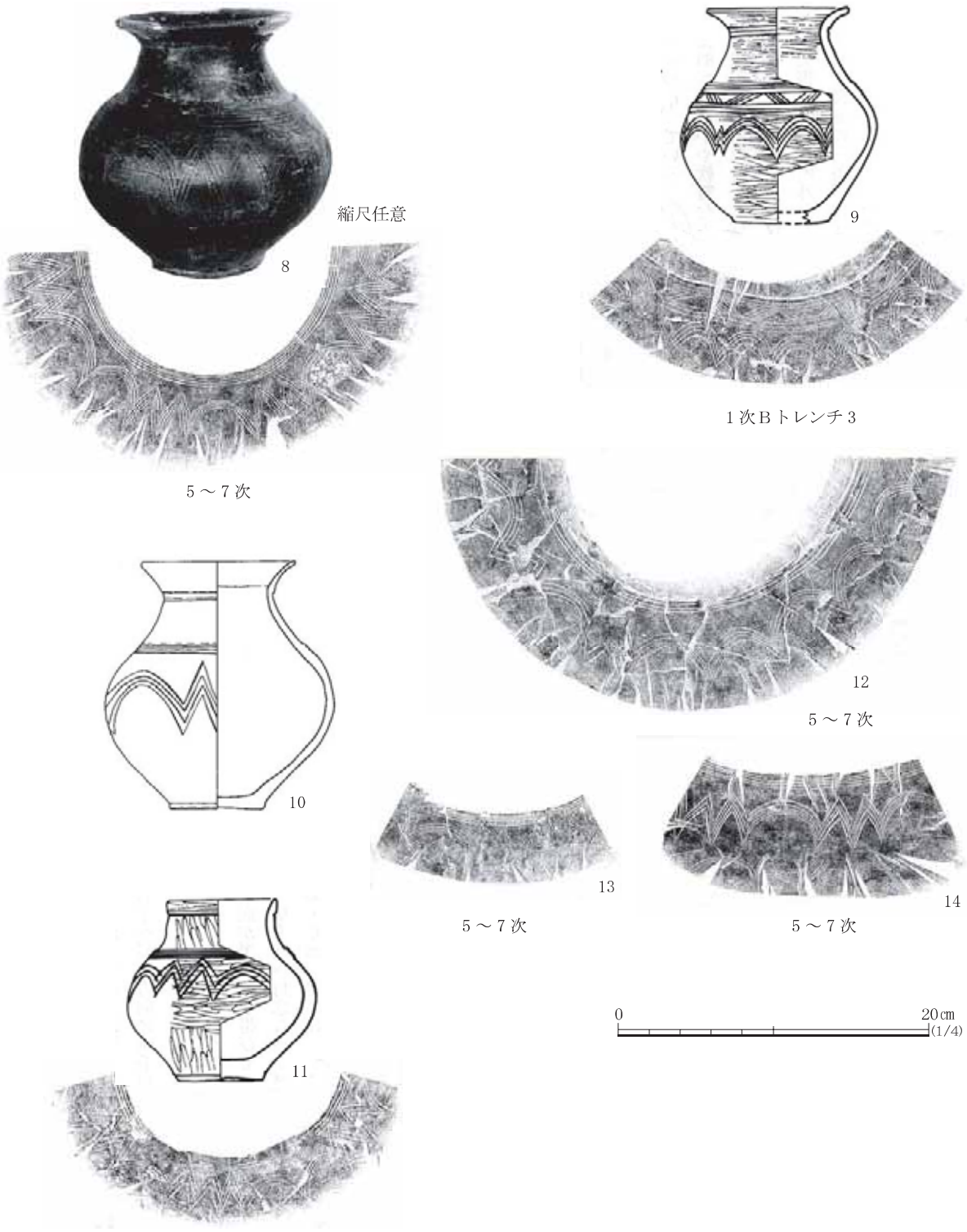
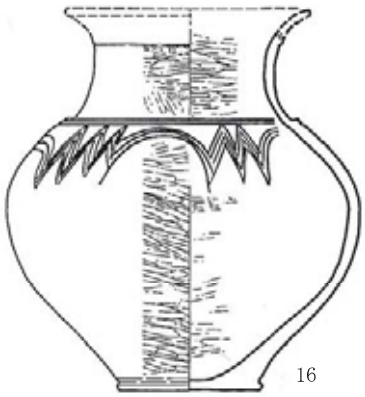


図 42　山形重弧文施文土器②（中ノ浜遺跡）

縮尺任意

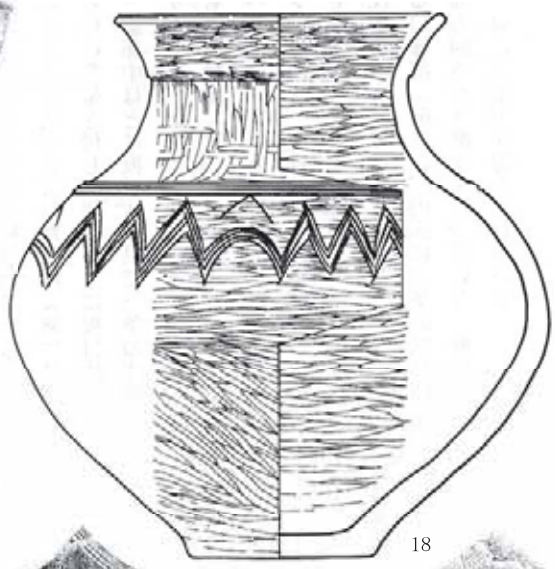
15

5～7次Ⅰ2区1号遺構

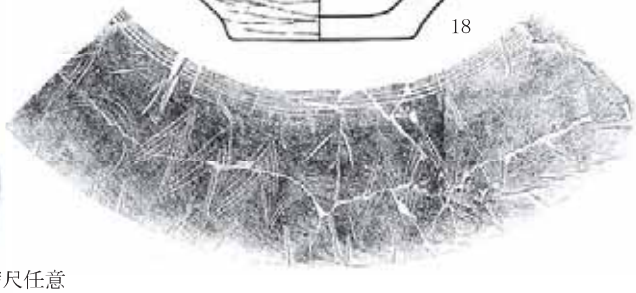


16

9次Bトレンチ4区第4層



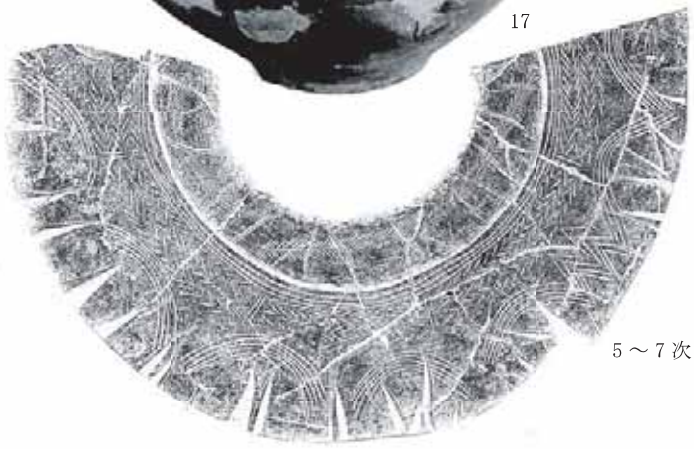
18



1次Aトレンチ2

縮尺任意

17



5～7次Ⅰ3区10号遺構

図43　山形重弧文施文土器③(中ノ浜遺跡)

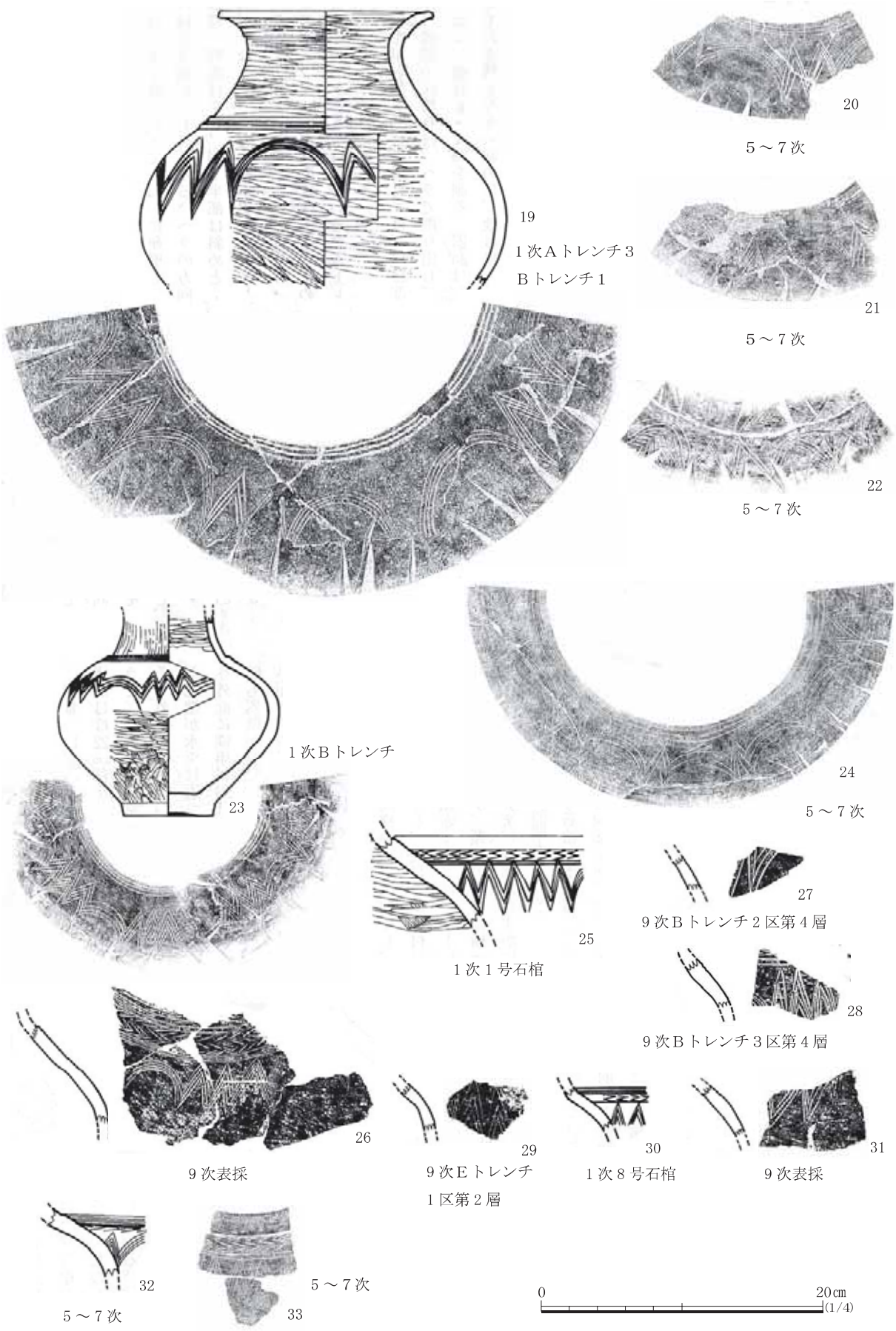
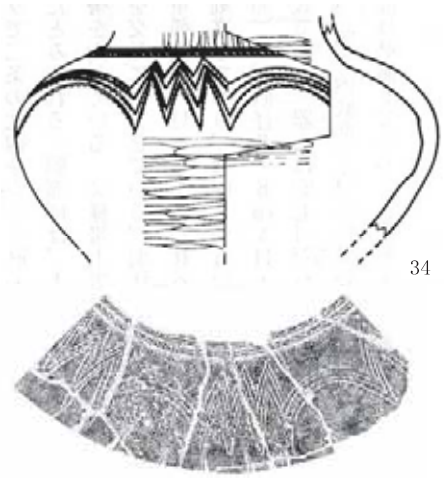
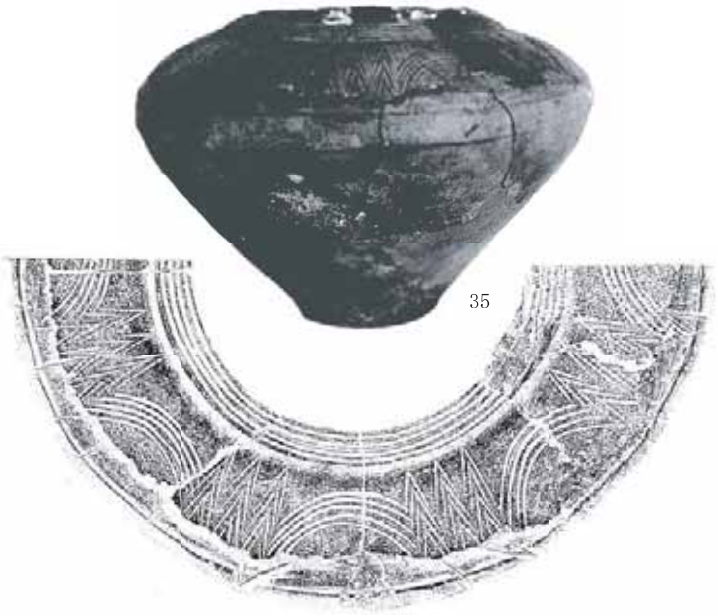


図 44　山形重弧文施文土器④(中ノ浜遺跡)

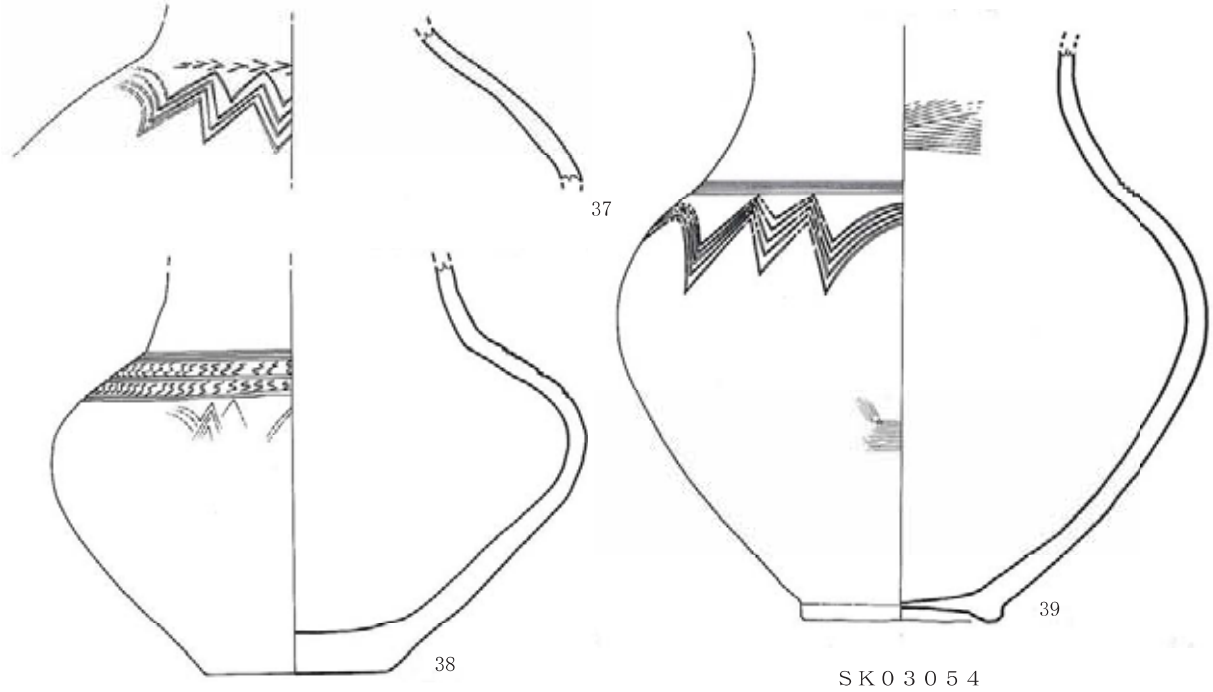


1次4号配石



5～7次D1区4号人骨付近

中ノ浜遺跡



SK02043

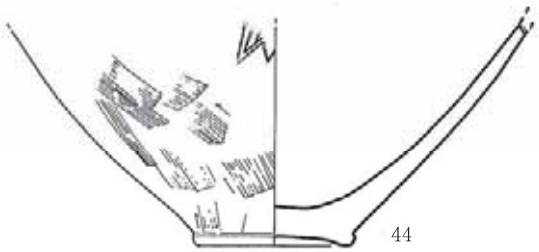
SK03054

SK02016　　SK04069　　SK03059

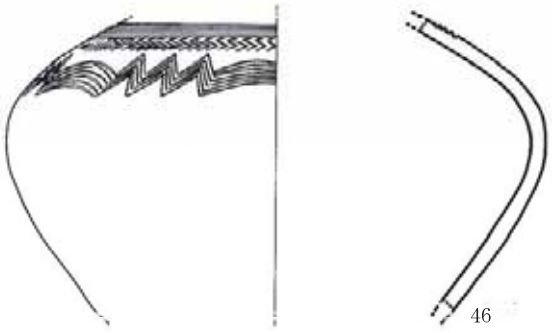
高野遺跡

図45　山形重弧文施文土器⑤(中ノ浜遺跡、高野遺跡)

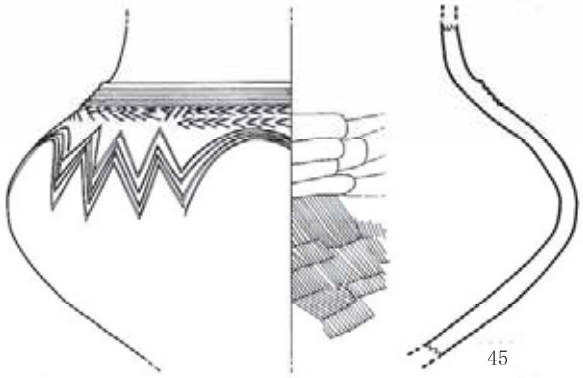
ＳＫ０３０６７



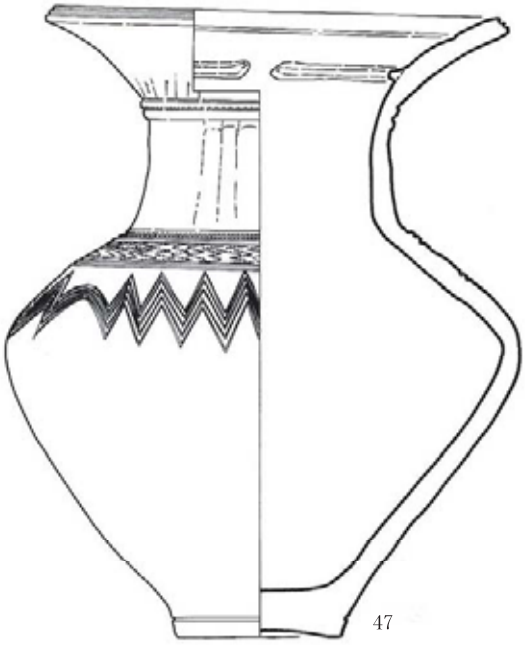
ＳＫ０３０６７



ＳＫ０３０４６

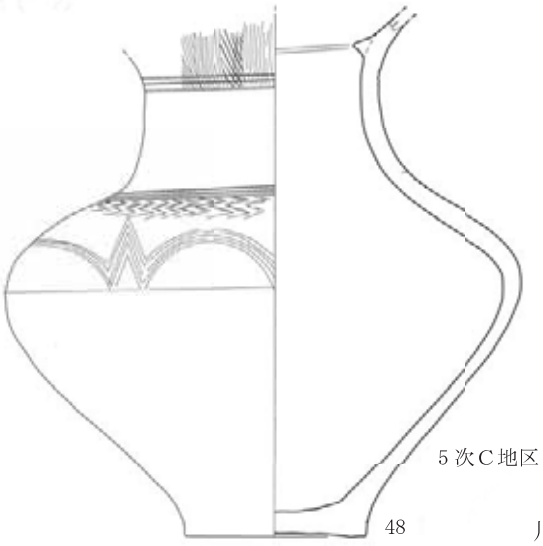


ＳＫ０３０５５



ＳＫ０３０７０

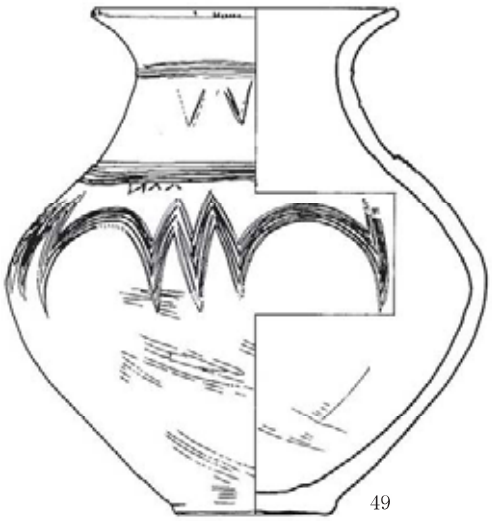
高野遺跡

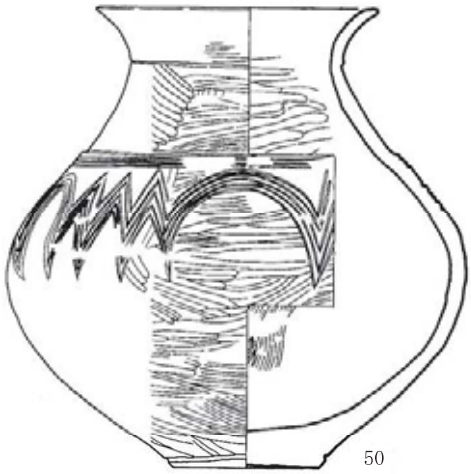


５次Ｃ地区ＳＫ１７５Ⅲ層

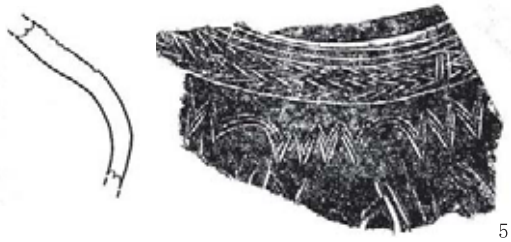
川棚条里跡

図 46　山形重弧文施文土器⑥(高野遺跡、川棚条里跡)

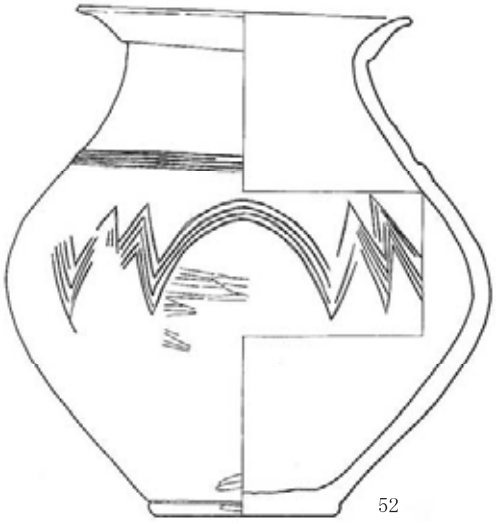




Ⅴ地区ＳＤ３１４



Ⅴ地区ＳＤ３１４

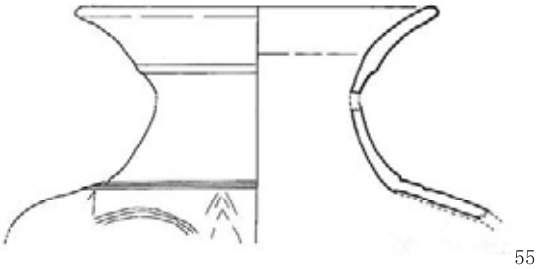


Ⅵ地区ＳＤ３１４

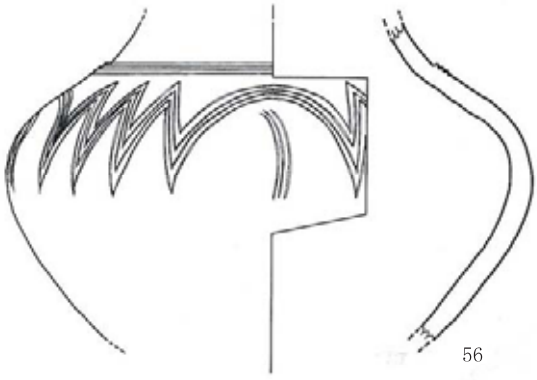
ＳＫ４９

山ノ口遺跡

吉永遺跡



第 25 地区ＳＫ２０



第 11 地区ＳＫ２０

下七見遺跡

図 47　山形重弧文施文土器⑦(吉永遺跡、山ノ口遺跡、下七見遺跡)

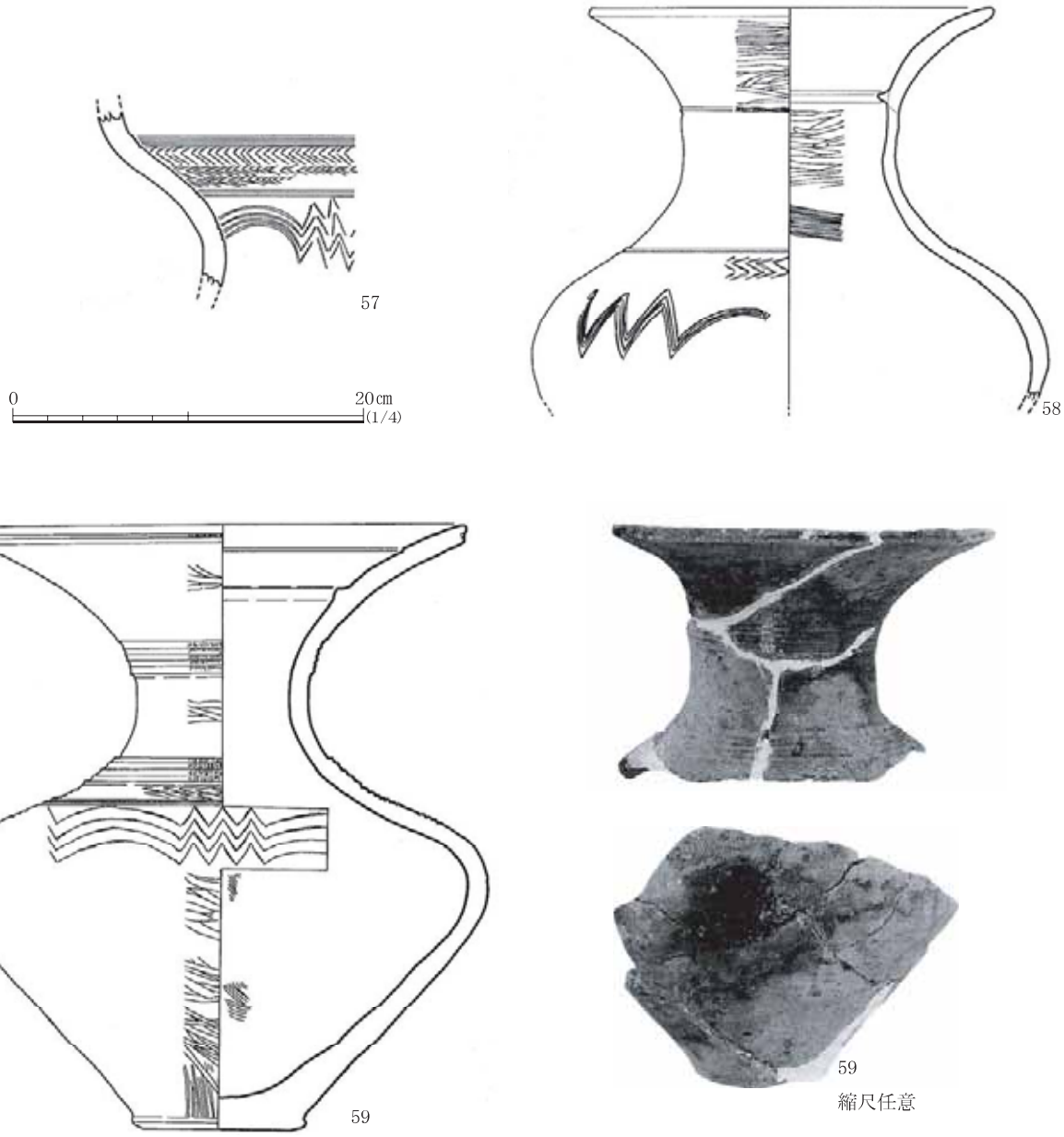


図 48　山形重弧文施文土器⑧(下七見遺跡)

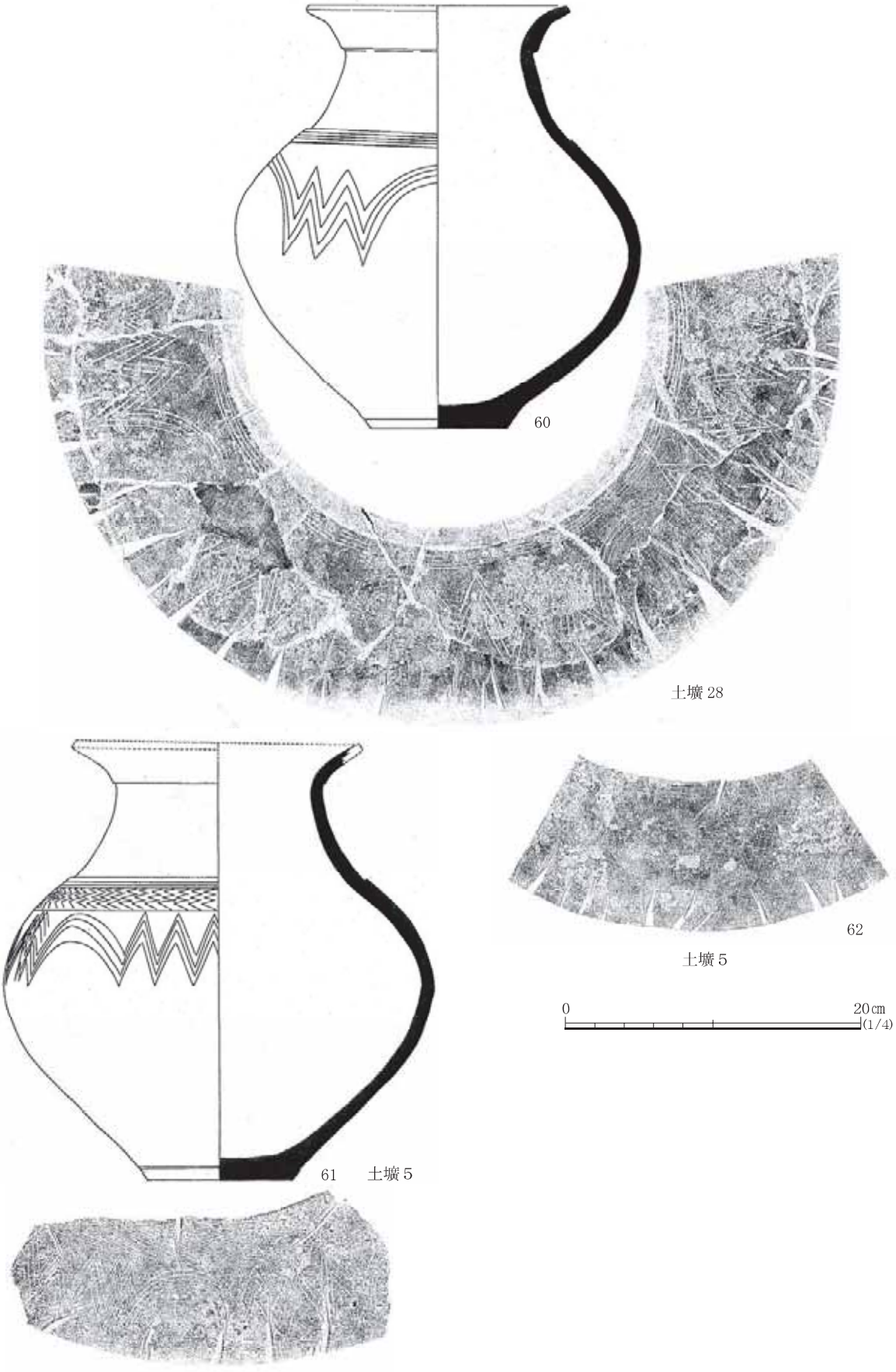
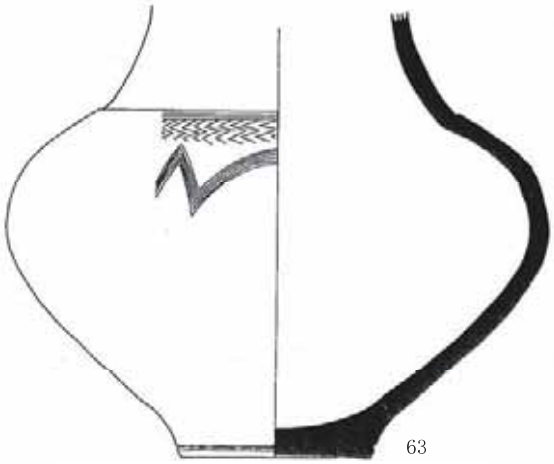


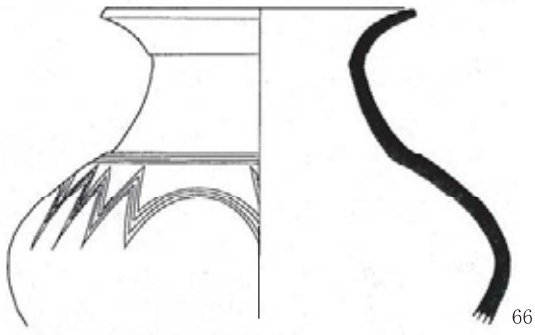
図 49　山形重弧文施文土器⑨(上原遺跡)



土壙４１

土壙３３

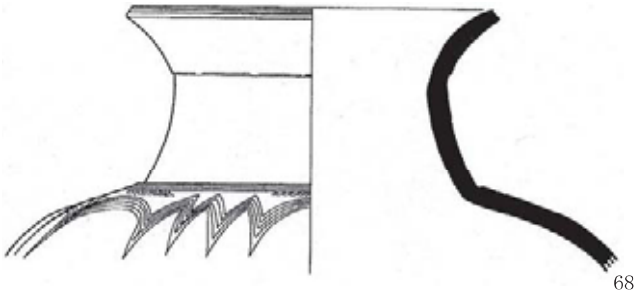
土壙３３



土壙６１

土壙４２

土壙６１　　土壙３５



土壙７０

図 50　山形重弧文施文土器⑩(上原遺跡)

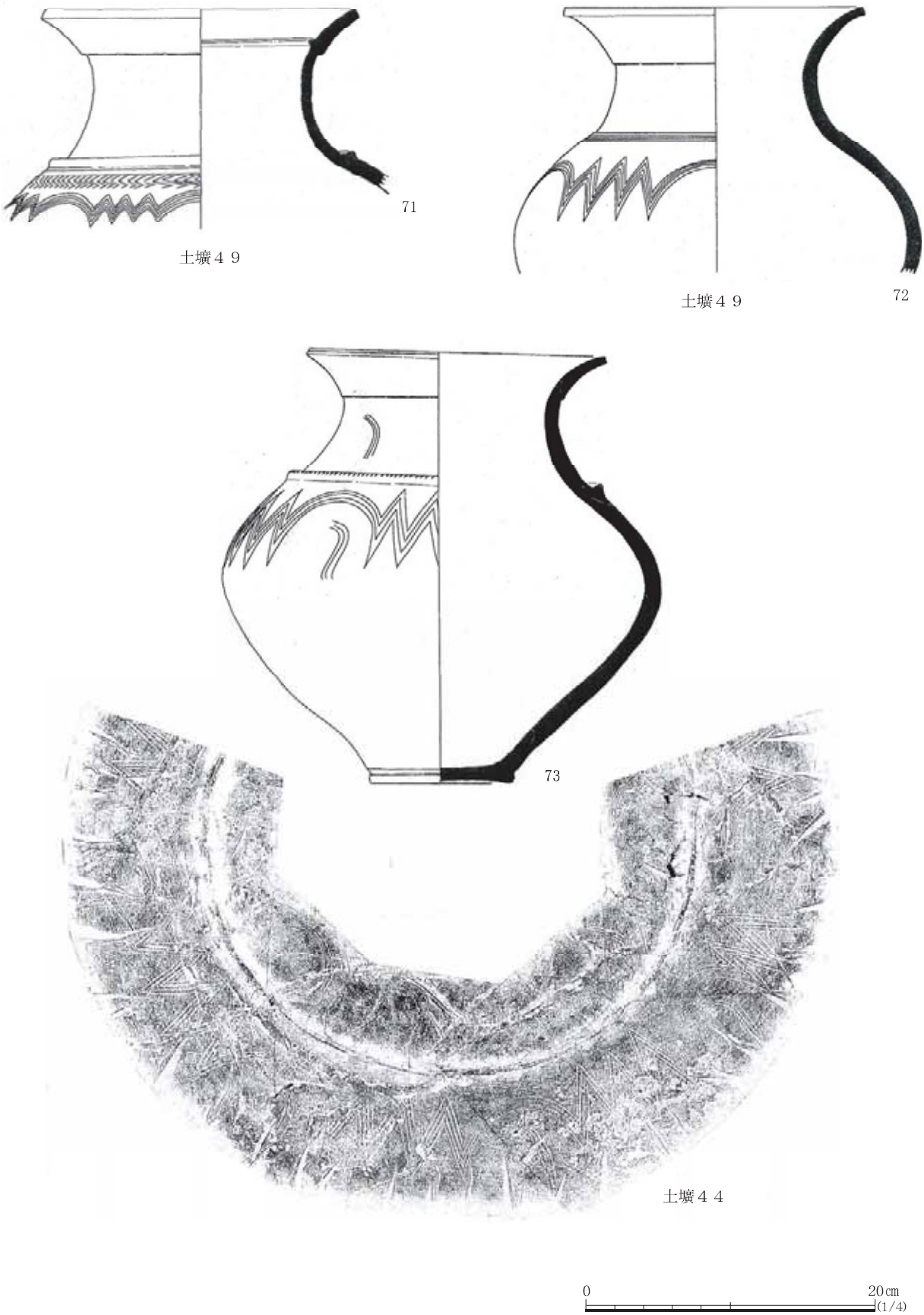
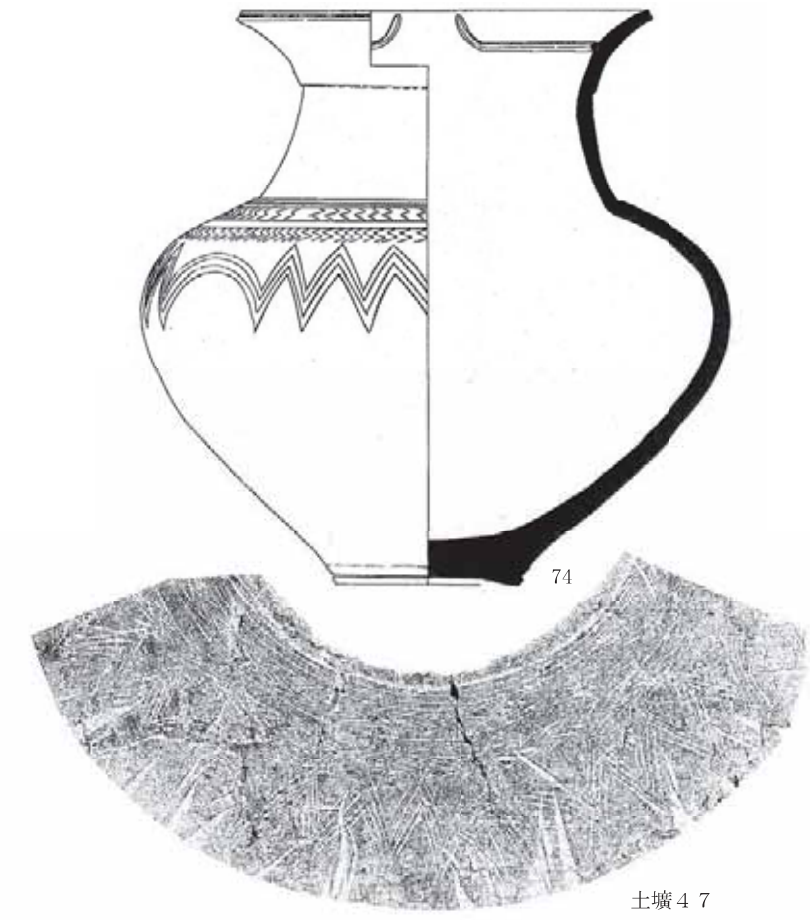
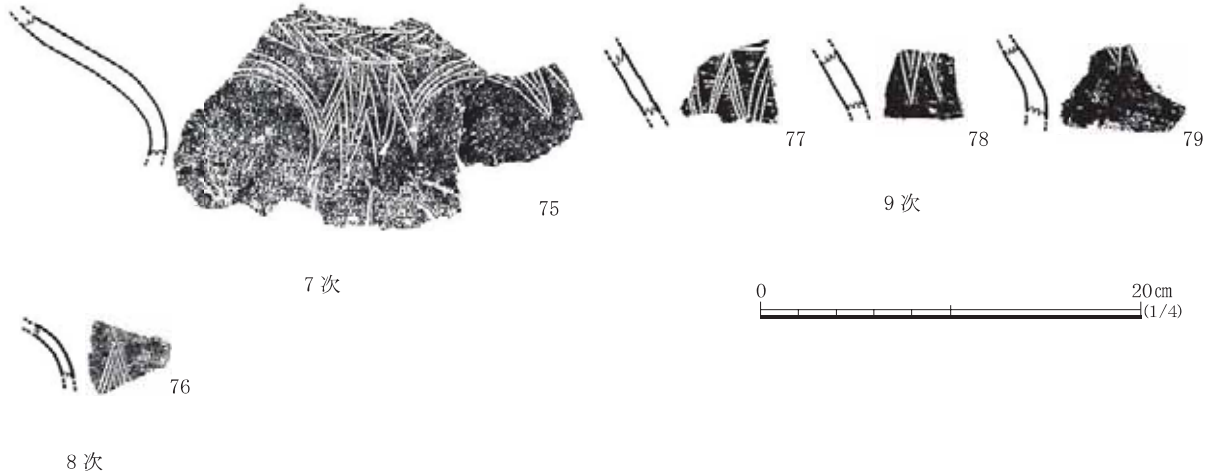


図 51　山形重弧文施文土器⑪(上原遺跡)



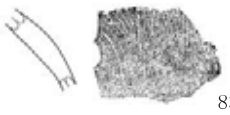
上原遺跡



土井ヶ浜遺跡

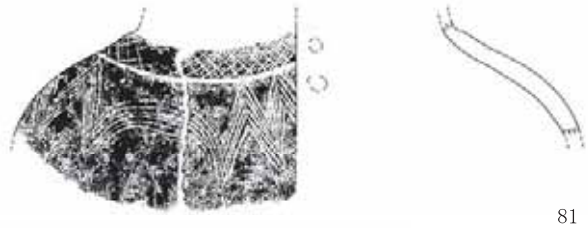
図 52　山形重弧文施文土器⑫（上原遺跡、土井ヶ浜遺跡）

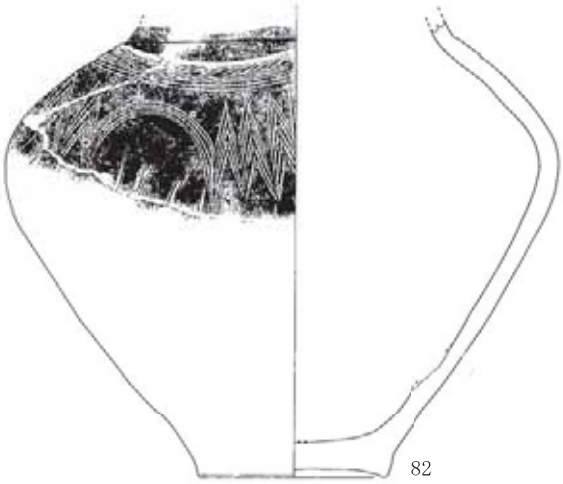
ＳＸ００６１



南地区Ｂトレンチ３

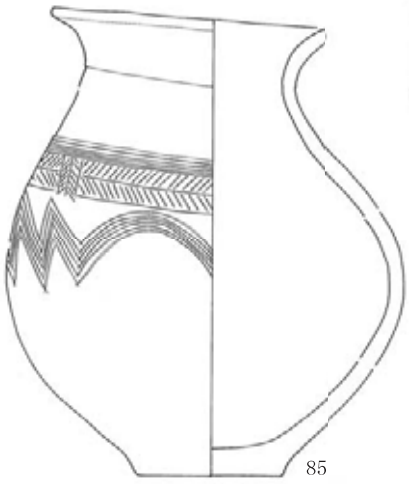
上今宮遺跡

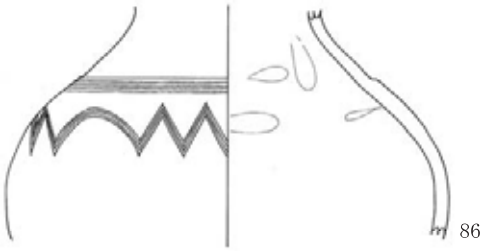




ＳＸ００５６

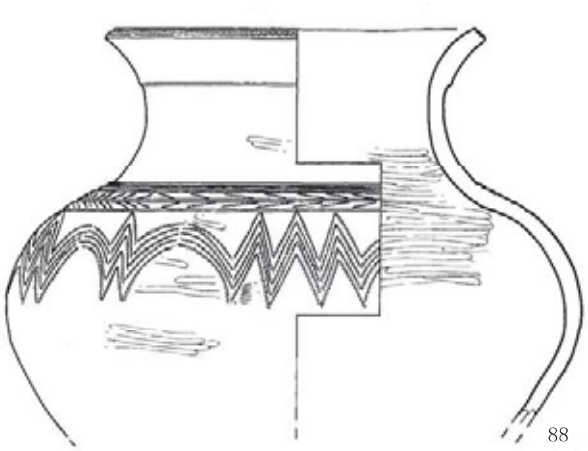
寺ヶ浴遺跡

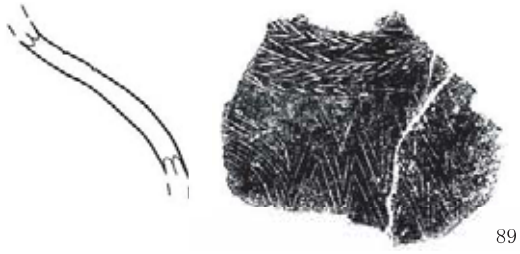


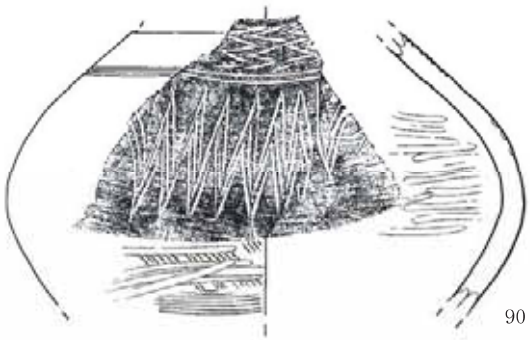


角島沖田遺跡

図 53　山形重弧文施文土器⑬（寺ヶ浴遺跡、上今宮遺跡、角島沖田遺跡）







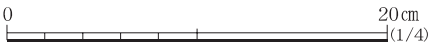
C区遺物包含層

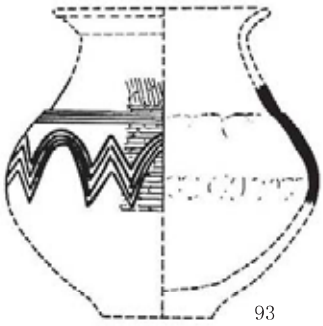
宮迫神田遺跡

92 縮尺 1/2

附属図書館敷地
第4層黒褐色粘質土

吉田遺跡





イセ地区C2区第3層

半田遺跡

図54　山形重弧文施文土器⑭(宮迫神田遺跡、吉田遺跡、半田遺跡)